

東魏北齊壁画墓の研究

——正面向き墓主像を中心として——

《キーワード》魏晋南北朝時代 北方系民族 壁画墓 正面向き墓主

柴 生 芳

(神戸大学大学院文化科学研究科)

東魏・北齊は西暦五三四年、北魏北鎮軍人の反乱によって、經濟、文化の進んでいた黄河下流域で打ち建てられた政權である。五七七
年北周に滅ぼされるまで、東魏・北齊二つの王朝でわずか四十三
年の歴史であったが、隋唐律令国家に先行する諸制度の形成期として
重要な役割を果たした。東魏北齊の壁画墓は、北魏晚期壁画墓の伝
統を受けながら、独自の特色を形成し、隋唐壁画墓に大きな影響を
与え、中国と東アジアの美術史に重要な地位を占めている。東魏北
齊壁画墓は墓道壁画及びその列戟、儀仗、大龍、大虎などの画題が、
隋唐墓葬壁画の濫觴になったこと⁽¹⁾によって非常に重要視され、数多
くの論文が発表されている。

しかし、これらの論文の中では、東魏北齊壁画墓の重要な特徴と
も言える正面向きの墓主像、特に正面向きの墓主坐像について、ほ
とんど触れられていない。正面向き墓主像が重要である⁽²⁾というのは、
墓道壁画と同時に出現していたからである。もっとも、隋唐墓葬壁

画に踏襲されなかったことが、正面向き墓主像が軽視された理由の
一つであるかもしれない。しかし、正面向き墓主像が反漢化主義の
政策を遂行した東魏北齊王朝にあったことこそが、中国古代の文化
転換期の現象の一つとして興味深い。それは文化受容と変容に関す
る問題である。それを通じて、転換期である魏晋南北朝時代におけ
る文化交流、融合の様相が解明できる。本稿は民族性、地域性、時
代性の面から論じていくものである。

第一章 正面向き墓主像の民族性

(一) 東魏北齊壁画墓

これまでの発掘調査によって、東魏・北齊時代に造られた多くの
壁画墓が発見された。現在までに、東魏・北齊の領域であった河北、
河南、山西及び山東で、約二十一基の壁画墓が発見されている。中

でも、墓主像が描かれている壁画墓が五つある。それらは、河北磁県にある東魏の茹茹公主墓（五五〇³）と北斉の高潤墓（五七六⁴）、山西太原にある北斉の婁叡墓（五七〇⁵）と金勝村の北斉壁画墓（不明⁶）、及び山東済南にある北斉の道貴墓（五七一⁷）である。これらの壁画墓では、墓主像はすべて正面向きで、墓室の奥壁（北）に南面にして描かれている（図版1、2）。これらの正面向き墓主像のもっとも著しい特徴は、墓主像そのものが一つの独立した画面で、墓主像は、静かで、しかも荘嚴な雰囲気を溢れさせている。また、奥壁にあるこれらの墓主像に呼応して、墓室の左右両側の東西壁面に墓主の侍従・車馬、門洞のある南壁に門吏、位が高い墓主の場合には、墓道の両壁面に青龍、白虎、列戟を持つ儀仗隊列、或は出行・帰還図が描かれ、正面向き墓主像が壁画構成の中心になっている。壁画の題材によって、墓室内のどの壁面に描かれるかという決まった規則が存在し、壁面そのもの自体も意味があると考えられる。つまり、奥壁の真中にある正面向き墓主像を中心とする墓室壁画全体によって、墓室空間自身に特定な意味が賦与されるのである。これらの墓室に入ると、墓主を納めている棺がなくとも、奥壁の真中にある正面向き墓主像と、それを中心にして構成されている壁画によって、礼拝場所に入るかのような強い臨場感が感じられる。これは墓主像を神格化した結果とも考えられている⁸。

現在まで発見された二十一基の東魏北斉壁画墓中、前述した五基の正面向き墓主像のある壁画墓以外の十六基の壁画墓では、三基は墓室に壁画が描かれず（庫狄廻洛墓⁹、堯峻墓¹⁰、李勝難墓¹¹）、九基は墓室に壁画が描かれていたが、剥落してしまい判明しない。（封思

温墓、趙胡仁墓、高長命墓、湾嫩大墓、司馬南安墓、范粹墓、河北吳橋小馬莊村墓、北京王府倉墓、河北磁県曹家莊墓¹²）。また残りの四基の壁画墓では、墓室の奥壁の真中に、墓葬壁画の全体的構成の中心となる正面向き墓主像は描かれていなかった（崔芬墓¹³、崔昂墓¹⁴、顔玉光墓¹⁵、済南市東八里窪墓¹⁶）。すなわち、同じ時代、同じ東魏北斉王朝の統治の下でも、墓主像に対する認識や態度がことなっていたことが分かる。

一方、前述した正面向き墓主像のある壁画墓の被葬者は東魏丞相高歡の息子の幼妻茹茹公主、北斉四代の皇帝の愛弟高潤、高歡妻の甥で北斉四代皇帝の親戚婁叡、「將軍の夫人」である金勝村墓墓主と祝阿県令の道貴である。それぞれは色々な階級に属している。皇族である茹茹公主、高潤や外戚である婁叡がいれば、低級官吏である祝阿県令である道貴もいるのである。換言すれば、墓主像を神格化させるのは皇室貴族だけの特殊な権利ではないことが分かる。また、正面向き墓主像が描かれていない四基の壁画墓の被葬者の中には、身分が正三品の朝廷要員である崔昂もいる。すると、正面向き墓主像が描かれるかどうかという問題は被葬者の身分とは関係がないと言える。一方、東魏北斉時代は反漢化の意識が非常に強かった時代であるので、所属民族の観点から検討してみたい。

茹茹公主は、東魏の丞相である高歡の九番目の息子の幼妻で、茹茹主阿那瓌の孫である。隣和公主とも呼ばれ、十三歳の時に早逝した。高氏一族と茹茹公主の婚姻はまったく政治外交のために結ばれたものである¹⁷。茹茹は¹⁸、また蠕蠕¹⁹、芮芮²⁰、柔蠕²¹、柔然と呼べ、四世紀ごろから六世紀中ごろまで蒙古を支配した遊牧民族

であり、南北時代、特に北魏が分裂した北朝の晩期における北方草原地帯の強大な政治軍事集団として、中原王朝に大きな影響を与えた。また、高潤は、東魏北齊の皇族、高歡の十四番目の息子である。高歡一族の出身について、『魏書・高湖伝』と『北史・齊神武帝紀』の記載によれば、渤海郡蓲県の漢人の豪族高氏であり、『累世北邊、故習其俗、遂同鮮卑』した、いわゆる「胡化漢人」である。²⁶しかし、日本の学者濱口重国氏を始め中日両国の学者はこれらの記載を疑問視して、高氏の世系は偽造されたものと提唱している。²⁷つまり、北齊高氏は漢民族でないという。まとめると、北齊高氏の出身には「胡化漢人」と北方系民族或は鮮卑族の二つの説があり、いずれも「胡」と関わるので、本論の出発点と矛盾しないが、北方系民族或は鮮卑族説の論拠の方がより有力であるから、私はそれに従いたい。婁叡は神武（高歡）明皇后婁氏の甥であり、『魏書・官氏志』には「匹婁氏後改為婁氏」とある。姚薇元氏の『北朝胡姓考』によると、婁氏は吐谷渾の一つの部落に属し、皇興四年（四七〇）に敗戦して魏に降したのであった。²⁸吐谷渾は青海で活躍していた慕容鮮卑の一族である。²⁹道貴は、発掘報告書では出土した墓誌に「南陽人」とあることによって「南陽張氏」と推定しているがあまりに断定的であり、実際は不明な点はまだ残っている。³⁰金勝村墓の墓主の出身は、出土品と壁画の内容から判断できなかったもので、発掘報告書にはふれられていない。

以上五基の正面向き墓主像のある壁画墓の被葬者の中では、所属民族が確定できる三人、即ち茹茹公主、高潤と婁叡すべてが北方系民族に属することが分かる。

東魏北齊時代における二十一基の壁画墓の中で、被葬者が北方系民族の出身者だと判明できるのは、この三人以外にも二人いる。一人は、湾漳大墓の被葬者である。湾漳大墓は北齊の皇帝陵、つまり、被葬者は北齊の皇帝高洋で、皇族の高潤と同じ出身で間違いのない。庫狄廻洛墓の被葬者の庫狄廻洛は、前掲の姚薇元氏の『北朝胡姓考』によれば、庫狄氏は元々は鮮卑段氏の出身であったが、帰魏の後、北方の辺境、即ち北鎮に置かれていた。³¹また、『魏書・官氏志』には「次南庫狄氏、後改為狄氏」とあるが、北齊時代においてまた庫狄の姓氏があるのは、当時胡姓が再び流行していたことを物語っている。³²庫狄廻洛墓の墓室内には壁画が描かれていないので、ここでは別にするが、湾漳大墓、すなわち高洋墓は、正面向き墓主像が描かれている高潤墓と茹茹公主墓と比べると、規模がやや大きい以外、全体的な構造、壁画の題材、内容及びその配置はほぼ同じである。高洋墓の墓室の奥壁における壁画は画面が剥落してしまっており、正面向き墓主像は検出できないが、高潤墓、特に茹茹公主墓と似ている点から見れば、高洋墓の墓室奥壁の下段に正面向き墓主像とその侍従が描かれていた可能性は非常に高い。

つまり、現在まで発掘された五基の北方系民族出身者の墓中では、墓室壁画が描かれていなかった一基を除けば、のこる四基は、すべて墓室の奥壁、すなわち正壁の中央部に正面向き墓主像が描かれているか、或は描かれていたのである。一方、正面向き墓主像のない四基の壁画墓の被葬者はすべて漢民族の出身者で、しかも、崔芬の臨胸崔氏と崔昂の平山崔氏は、いずれも当時北方の名門豪族である。よって、正面向き墓主像は東魏北齊時代における北方系民族

出身者の壁画墓の特徴と考えられる。この点からいえば、道貴墓と金勝村墓の被葬者は漢民族ではない。漢民族にしても、すでに胡化された漢人であろう。

(二) 南北朝時代他地域の壁画墓、また磚画墓

一、西魏北周時代

今まで発掘された六基の西魏北周壁画墓のうち、五基には壁画がほとんど残っていない。残りの一基の李賢墓³³は単室土洞墓で、墓道・過洞・掘り抜き室・羨道・玄室からなる。第一過洞と羨道(墓門)外側上方に二層門楼、第二・三過洞に一層の門楼、過洞・天井東西壁、墓道、天井などに武士像があり、墓道両側に一体ずつ、三つの過洞両側にそれぞれ一体ずつ、三つの掘り抜き室両側にそれぞれ一体ずつ配置される。武士はいずれも正面立像で、冠をかぶり、両当を着ている。墓室四壁には紅色で枠をした中に人物画像が描かれている。東壁には五幅あるが、一幅の女伎楽しか残っていない。西壁には五幅の執物女侍がある。奥壁には六幅が配置されているが、保存状態がわるくて画像の様子は判明しない。つまり、以上六基の西魏北周壁画墓の奥壁に正面向き墓主像が描かれているかどうか結論は出したい。しかし、李賢墓に描かれている正面向き武士の立像はきわめて目立っており、興味を惹かれる。墓葬壁画の中の武士像そのものの役割と重要性は墓主像と比べるとかなり小さいが、ここでまず注目すべきは正面向きであるということである。つまり、正面向き墓主像にしろ、正面向き武士像にしろ、いずれも正面観の意識をもって完成されたものである。しかも、この李賢墓の武士の

耳朶は仏像の耳朶を想起させる。西魏北周はさまざまに分野で東魏北齊と異なり、独自の特徴があるが、北魏孝文帝以来の漢化政策に反発して、一連の反漢化政策を推進したのは東魏北齊と同じであることが知られている。³⁴ 反漢化というのは、漢文化をそのまま学ぶことなく、漢文化に対してあたらしく解釈、あるいは改造することである。この点からいえば、正面向き武士像のある李賢墓の被葬者李賢の所属民族はこの問題点を解決する鍵になる。次に、被葬者の所属民族から論じていきたい。

『周書・李賢伝』には、李賢の出身については「其先隴西成紀人也」と記されるのみであり、非常に簡単であるが、『隋書』の弟の李穆の伝によると、李穆は自ら「隴西成紀人、漢騎都尉陵之後也。陵没匈奴、子孫代居北狄、其後随魏南遷、復歸汧隴、祖斌以都督鎮高平、因家焉」という。隴西成紀は現在の甘肅省の天水にあたり、漢騎都尉陵は前漢時代の名将李陵のことで、漢武帝天漢二(前九九)年に敗戦して匈奴に投降している。³⁵ よって、李賢の祖先は漢民族の出身でも、「代居北狄」、四百年以上たつてかなり胡化されたのであろう。前掲した姚薇元氏の考証によれば、李氏は元々は高車族の泣伏利(即ち叱李)氏で、北魏に帰したのち、李氏に改めているとい³⁶う。つまり、李賢は東胡高車族の出身であるという説である。自ら認めていた胡化された漢民族にしろ、姚説の高車族にしろ、北方系民族の風習に強く染められていたことは間違いない。すると、李賢墓の奥壁に正面向き墓主像の有無を確認できないものの、その正面向き武士図及び武士図自体の仏教美術における図像的な特徴は、東魏北齊壁画墓の奥壁に描かれている正面向き墓主像との共通点があ

るのではないだろうか。

二、北魏時代

現在まで発掘された北魏時代の壁画墓は元冢墓、王温墓の二基しかない。元冢墓³⁷は河南省洛陽にある方形单室磚築墓で、壁画は羨道、天井、墓室四壁に描かれていたが、天井の星象図と四壁上部の四神図像だけが残って、他の部分はすでに剥落している。具体的な様子は判明しない。王温墓³⁸は河南省孟津県北陳村にある单室土洞墓で、壁画は墓室壁面に描かれているが、東壁にある墓主夫妻の宴飲図の保存状態が一番良い。建物（帷幔）に座る墓主夫婦を中心に、侍女・童子・園林（山岳・樹木）が描かれ、生き生きと墓主夫妻の日常生活を表している。元冢墓の被葬者の元冢は、『墓誌集釈』によると、『魏書』にある元冢でもある。元冢は北魏第一代目皇帝拓跋珪の孫江陽王元継の長男で、肅宗朝の権臣である。無論、この元冢すなわち元冢墓の被葬者は鮮卑族の出身である。王温は、正史に伝記はないが、同墓出土した墓誌銘によれば、「燕国楽浪楽都人：晋司空沈之後也。昔逢永嘉之末高祖準晋太中大夫以祖司空・幽州牧浚遇石氏之禍、建興元年自薊避難楽浪、因而居焉⁴⁰」とある。「晋司空沈」、「司空・幽州牧浚」はすべて『晋書』卷三九王沈・子浚伝³⁹」に見え、「太原晋陽人」とある。つまり、王温本来の出身は魏晋南北朝時代における北方の漢族豪族である太原王氏で、永嘉の末、石氏（石勒）の禍によって、幽州の薊（北京）から楽浪（今の北朝鮮境内）に避難したのである。王温が漢民族の出身であることは間違いない。再び、目を壁画の方に移すと、元冢墓の被葬者の江

陽王元冢は北魏の皇室成員であり、北方系民族の出身である。壁画の保存状態は悪くて、正面向き墓主像が描かれたかどうかはつきり分からないが、同じ河南省洛陽にある漢族出身の王温の墓の中には、前述したように墓主像があるが、後壁でなく東壁に表現されていて、しかも、画面全体は墓主夫妻の宴飲の場面を表していて、東魏北齊壁画墓の中の神格化された正面向き墓主像とはまったく違うイメージである。北魏時代の漢民族出身の王温、司馬金龍の墓葬の中には、いずれも正面向き墓主像が描かれていなかったことが分かる。

また、北魏の二基の石椁壁画墓が発見されたが、その一基は大同市北魏宋紹祖墓⁴¹であり、单室磚築墓で、墓室内に立派な石椁が設けられている。壁画は石椁内の壁面に描かれ、保存状態が悪いので、北壁（奥壁）の撫琴図しか判明しない。残りの一基は同じ大同市にある大回智家堡北魏墓である。单室土洞墓で、壁画は門柱と石椁内の石壁に直接に描かれ、壁画の周辺に赤線の枠が設けられている。門柱に忍冬文、椁室頂部に花卉・忍冬文が描かれる。椁室の東西壁に蓮を持って墓主の方に向く男女侍従四人ずつが描かれ、その上にそれぞれ顔が向いている羽人二体が描かれている。南壁内壁の西側に牛車・車夫、東側に鞍馬・馬夫、石門内壁に樹下侍女二人が描かれている。北壁（奥壁）の中央部に帳内の榻上に正面向きに坐る墓主夫婦の並坐図が描かれ、その後ろは女侍三人、両側には男女侍従二人ずつが描かれている。この石椁壁画上の人物すべては鮮卑族の装束で表現されている。⁴²

宋紹祖は出土した墓誌銘によると、「幽州刺史」また「敦煌公」である敦煌郡の宋紹祖であることが分かる。『魏書』、『北史』、『資治通鑑』などの正史にその伝は見えないが、敦煌郡の出身であるこ

とがはっきりしており、敦煌の宋氏に間違いはないだろう。文献史料によると、魏晋以来敦煌には、張、李、曹、索等の漢族豪族がいたが、同時期に、敦煌で隠居して講学した張換、宋行、索襲、郭高らには生徒の数が百から千人ほどおり、また本を著し、学説を立てていた。宋紹祖はその漢民族である宋行一族出身の可能性が高い。一方、大同智家堡墓には、墓誌が発見されなかったが、その壁画上の人物すべては鮮卑族の装束で表現されていることから被葬者は鮮卑族出身であることには間違いない。漢民族の宋紹祖墓には、北壁に正面向き墓主像がないが、鮮卑族の智家堡墓には、北壁（奥壁）に正面向き、しかも鮮卑族の装束の墓主夫婦坐像が描かれている。また、北魏漆棺画が発見され、その上に墓主像が描かれている例もある。中でも、固原北魏墓の漆棺画⁽⁴³⁾がよく知られる。固原北魏墓は寧夏固原の西郊にあり、单室土洞墓で、中に納められた棺には漆画が描かれている。破損していたが、復原されたので、画面の内容とその配置が大体分かる。棺蓋に日月、天象、奇草、瑞獸、建物に正面向きに端坐する東王父、西王母及びその侍従が描かれている。頭部の棺板に、建物に坐る正面向き墓主像⁽⁴⁴⁾、建物の両側に男女侍従が二人ずつ描かれる。両側の棺板は三段に分けられ、上段に孝子図、中段に連珠・亀背文の背景で人物、或は瑞獸、下段に狩猟図が描かれている。墓主とその侍従は鮮卑族の装束で表現されているので、鮮卑族出身と考えられる。

三、南朝時代

南朝の領域では、壁画墓は極めて少ないが、磚画墓は幾つか発見

されている。現在まで発見された南朝磚画墓は約十基以上あり、保存状態が良く墓主が推定できるものは鎮江市郊外農場東晋墓⁽⁴⁵⁾、河南省鄧県南齐墓⁽⁴⁶⁾、南京西善橋宮山墓⁽⁴⁷⁾、南京西善橋油坊村墓⁽⁴⁸⁾、丹陽胡橋仙坳墓⁽⁴⁹⁾、丹陽建山金家村墓⁽⁵⁰⁾、丹陽胡橋吳家村墓⁽⁵¹⁾などがある。中でも、西善橋宮山墓は劉宋の孝武帝劉駿の景寧陵、西善橋油坊村は陳の宣帝陳頊の顯寧陵、仙塘湾墓は南齐景帝蕭道生の修安陵、金家村墓は明帝蕭鸞の興安陵、吳家村墓は南齐最後の和帝蕭宝融の恭安陵に比定される。これらの磚画墓は河南省鄧県南齐墓を除けば、すべて南朝の中心地南京、或は南京の周りにあたる地域にあり、しかも殆どは南朝各代の帝王の陵墓であるが、磚画の題材は主に「竹林七賢・榮啓期図」を中心として、墓主に関する画像は一切ない。一方、漢文化の中心地である都の南京の周りでは、両漢以来の題材は前述した鎮江市郊外農場で発見された東晋晚期、すなわち四世紀末の三九八年の墓にまだ残っているが、南朝に入ると、漢民族の伝統的な題材は消えてしまっただけで、代わりに玄学的彩色が濃い「竹林七賢・榮啓期図」が中心になっていることは興味深い。

以上、東魏北齐壁画墓における正面向き墓主像は北方系民族、特に鮮卑族の漢晋以来伝統的な墓葬壁画に対する新しい解釈に基づく産物といえる。それは時代的、また民族的な共通性をもたない特殊なものとも言える。

第二章 墓主像の歴史的側面

では、東魏北齊壁画墓における正面向き墓主像が、北方系民族の漢晋以来の伝統的な墓葬壁画に対する新しい解釈とすれば、漢晋以来の墓主像はどのような形式であるか、また東魏北齊、或は南北朝時代以前の北方系民族出身者の壁画墓中の墓主像の様相はどうであるか。次は、歴史的側面から墓主像について検討してみたい。

(一) 漢晋以来の墓主像

墓主像は、戦国時代にすでに墓葬の中に出現している。現在までに、発見された最も古い墓主像の例は、長沙子弹庫における楚の墓から出土した戦国時代の帛画である。帛画は椁蓋板のすぐ下の薄い隔板（内板）上に、画面を上にして広げて置かれていた。長さ三七・五センチ、幅は二八センチの長方形の絹を用い、上端に一本の細い竹を横にわたし、掛けるために竹の真中近くに紐が結んであった。帛画の内容は、人物御龍帛画と称される通り、髭のある一人の男子が画面の中央に左向きに立ち、二本の手網をとって龍を御している。龍は胴を平らに、頭と尾を高く挙げ、文字通り龍舟の形を呈する。そしてその上に質素な蓋が宙に浮いて描かれ、三本の飾り紐が下に垂れて風に舞っている。また龍の尾に一羽の鳥がとまって立ち、左下には一匹の魚が泳いでいる。この帛画にある人物は昇仙途中の墓の主人と考えられる。それから、長沙南郊の陳家大山楚墓から発見されたいわゆる晩周帛画⁽⁵⁴⁾、長沙馬王堆一号⁽⁵⁵⁾、三号墓⁽⁵⁶⁾から出土した前漢初期帛画、また山東省臨沂金雀山九号墓から発見された

前漢武帝期帛画⁽⁵⁷⁾に墓主像の姿がしばしば登場している。また、前漢中期から盛んになった墓葬壁画には、墓の主人は昇仙、或は昇仙後の神仙世界生活の主役としても頻繁に表されている。しかし、これらの墓主像は基本的には側面を向いている動態的形象で、日常生活情景の描写となつている。墓主像は壁画構図の中心であつても、側面をむいている。甘肅省酒泉で発見された酒泉丁家閘五号墓⁽⁵⁸⁾は東晋・十六国時代の壁画墓で前室のすべての壁面に壁画が描かれている。壁画は六段からなり、上から一段目は蓮華藻井、二段目は空白である。三段目は四壁上部に龍頭は一つづつある。龍頭以下の西壁に、山岳（崑崙山）に安座する西王母と九尾狐・三足鳥、天馬、月象図、東壁に東王公、日象図、南壁に麒麟（白鹿）、北壁に天馬が表現されている。六段目は西壁を除いて、東壁の南、北両端、南壁と北壁に亀が一つづつあり、また東壁北端の亀の前に二つの陶壺があり、北壁の亀の前に三つの房屋がある。四、五段目は墓主人燕居行楽図・出遊・莊園農耕・桑蚕・畜牧・林園・運輸・庖厨などの日常生活についての内容が描かれているが、奥（西）壁にある墓主燕居行楽図は四段目と五段目の二つの壁面を占め、画像も他の画面よりかなり大きく、壁画全体の構成の中心位置に配されることに間違いないが、墓主像そのものは依然として側面的、動態的イメージである（図版3、4）。

一方、同じ酒泉丁家閘五号墓の前室壁面には、天井東壁にある東王父と西壁にある西王母は正面向きで描かれている（図版5）。また、壁画墓と同様に流行していた磚刻あるいは石刻壁画とも言える画像磚、画像石墓中に、墓の主人は殆どが側面向きであるが、神様とする

東王父・西王母すべては正面向きである。つまり、漢民族の墓中で、墓の主人は側面向きで、神様の東王父、西王母は正面向きであることは、現在まで発見された漢晋以来の墓葬に対する認識と直接に関連しているのではないか。なぜならば、漢民族にとって、死後世界と人間世界とは同質的世界であると考えられ、つまり、死ぬということは本当の死でなく、それは一つの再生でもある。そこで、墓の主人そのものは依然として人間のように生きているのであり、神様でない。一方、神仙世界は東王父、西王母が支配しているので、墓の主人はその世界に入っても単なる一人の新居民にすぎないのである。

(二) 正面向き墓主像の登場

しかしながら、四世紀前半の東北地方では正面向き墓主像のある壁画墓がいくつか発見された。その中でもかなり古い例である朝陽袁台子壁画墓⁵⁹の中では、正面向き墓主像は墓室右(西)壁南側の龕室の後壁に描かれている。墓主は黒い冠をかぶり、黒領広袖の赤い衣服を着、左手に杯を持って胸の所に置き、右手は塵尾を持ち帳内の方榻に坐っている。後ろの左右に侍女が立っている(図版6)。東耳室にある側面向き墓主像の宴飲図と比べると、この正面向き墓主像及び画面全体は静かで、荘厳な雰囲気は溢れている。東北地方では、漢晋以来、壁画墓が大量に造られていたが、正面観の意識をもって墓主像を描くのは、朝陽袁台子壁画墓が初出例である。また遼陽上王村墓⁶⁰には、墓主像は右耳室の後壁に描かれている。墓主は冠をかぶり、鬢をたくわえ、右手に塵尾をもち正面を向いて、朝陽袁台子壁画墓とよく似ている。その他、前燕から逃げた冬寿の

墓は北朝鮮の黄海北道で発見されたが、墓主像は右側室の右壁に描かれている(図版7)。その前壁に墓主夫人像が描かれている。銘記によると、時代は三五七年であることが分かる。正面向き墓主像がまだ側室或は耳室に描かれるこれらの三基に対して、同じ前燕時代晩期の朝陽太平房村壁画墓と北廟村壁画墓では、正面向き墓主像はすでに墓室の後壁に移っている。ここで注目すべきは前述した五基壁画墓の被葬者の出身がそれぞれ鮮卑或は鮮卑族化した漢民族と推測されることである。また、朝鮮半島では、冬寿の安岳三号墓をはじめ幾つか正面向き墓主或は墓主夫婦坐像が描かれている壁画古墳が発見されている⁶²。現在までの発掘調査の結果によると、高句麗壁画古墳にあって、高句麗の王陵として壁画墳が採用されたのは湖南里四神塚であったと推定され⁶³、墓室四壁に四神が描かれていることが知られる。よって、高句麗王族の墓には、正面向き墓主像が描かれてなかったと言えよう。すると、これらの正面向き墓主像が描かれている高句麗古墳の被葬者は、安岳三号墓の冬寿と同じく三燕、或は他の鮮卑部族から朝鮮半島に亡命してきた鮮卑族、または鮮卑族の影響を強く受けた高句麗人であると推定できるだろう。

(三) 正面向き墓主像の地域性と時代性

以上に基づいて、地理的分布を見れば、正面向き墓主像のある壁画墓は殆ど北方地方にあり、しかも魏晋南北朝時代における北方系民族政権の管轄範囲以内、即ち東晋十六国時代における慕容鮮卑の朝陽、遼陽、高句麗の集安、朝鮮半島、北魏の大同、固原、及び東魏北齊の濟南、太原、磁県などの地域にある。

ところで、ここに一つの例外がある。それは雲南昭通にある東晋壁画墓である。昭通壁画墓は一九六三年、雲南省昭通後海子で発見されたが、壁書の銘文によると、これは東晋太元年間（三八六―三九六）の「建寧、越嶲、興古三郡太守：使持節都督江南交、寧二州諸軍事」である「霍承嗣」の墓である。⁶⁴墓は地表に造られた単室墓で、壁画は墓室全体に描かれている。天井部は、北壁に玄武と騎馬人物像、東壁に白虎、西壁に人物像と青龍、鳳凰、建物の図像が描かれ、龍の背に接して「右青龍」の文字がみえる。四壁の壁面は、北壁に塵尾を持つて榻にすわっている正面向きに端坐する墓主像が強調して描かれ、まわりに旌節、兵欄、華蓋などの儀仗がある。他の壁面には「夷漢部曲」、鎧馬、家丁、宅邸などの図像が描かれる（図版8）。人物像の右に銘文がある。確かに、この霍承嗣墓の奥壁に正面向き墓主像が描かれ、しかも東晋時代のものであることは否定できないが、東晋時代の他地域と比べると、壁画の構図、配置及び人物の形象はかなり異なっており、異民族的なイメージが強い。また、同時代の東北地方で発見された正面向き墓主像のある鮮卑族系壁画墓とはやはり大きな違いがある。現在の段階でまだ一例であるので、この南方地域しかも西南辺郡にあるこの霍承嗣墓について一層深く検討する必要があるが、別稿に譲りたい。

一方、正面向き墓主像は四世紀前半の鮮卑族壁画墓に登場したが、東魏北齐時代の終焉と共に、歴史の舞台から消えてしまった。現在まで発見された約八〇基の隋唐時代の壁画墓には、正面向き墓主像が一切ない。⁶⁵つまり、正面向き墓主像の存在年代は、まさに四世紀前半から六世紀後半までの南北の分裂時代に当たる。隋唐の統一に

ともない、文化に対する解釈も統一され、正面向き墓主像のような民族的色彩の濃い文化現象は完全に隋唐文化に吸収されてしまったのである。中国文化は数百年の歴史を経て、さまざまな民族と文化を融合し、ついに盛唐の華やかな文化を迎えることになる。

結 語

東魏北齐ないし北朝時代における正面向き墓主像の民族性、地域性、また時代性の総合的な分析を通じて、東魏北齐墓葬壁画の芸術的特徴と思想内容をより深く理解することができる。

墓主像は中国古代墓葬壁画における非常に重要な画題である。前述した通り、漢民族の伝統的な墓主像は側面的で動態的な形で、通常墓主の昇仙、或は昇仙後の日常生活が描かれている。漢民族の墓葬壁画において、正面向きで表現されるのはすべて神仙世界、または天国にある神瑞である。

正面向き墓主像は周辺、特に北方系民族が漢民族の伝統に対して新しく解釈した結果であり、文化交流における変異現象である。神様の正面向き姿をもって墓主を表現するのは、単なる表現形式上の変化だけでなく、まさに墓主像を神格化する行為で、墓主が神になることを願っていたのである。その理由は、漢民族の神仙思想の影響以上に、仏教、特に仏教図像の中国への伝来と直接的な関係があるのではないか。文化的拘りがなく、しかも実効を重視する北方系民族にとって、漢文化と仏教文化は同じである。大量の正面向き姿をもって表現された仏、また菩薩が彼らの日常生活に登場した時、仏

国に昇り仏になる仏教思想が彼らに強い影響を与えたに間違いない。従って、仏や菩薩が表現される正面向きの形象は、彼らの死後世界の姿、すなわち正面向き墓主像となったのである。⁶⁶⁾ 正面向き墓主像は漢民族の神仙思想と仏教の天国思想の、北方系民族、特に鮮卑族の死生観への反映であると言える。

註

- (1) 『中国美術全集』絵画編一二、墓室壁画、文物出版社 一九八九年・蘇哲
「東魏北齊壁画墓の等級差別と地域性」『博古研究』第四号、博古研究会 一九九二年・蘇哲
「北朝壁画墓研究」『季刊考古学』第五四期、雄山閣出版 一九九五年・楊泓
『美術考古半世紀—中国美術考古発見史』文物出版社 一九九七年。
- (2) 墓室壁画のある四基の壁画墓中、正面向き墓主像があることが判明しているのは三基あり、残りの一基は、正面向き墓主像が描かれていた可能性が非常に高い。
- (3) 磁県文化館「河北磁県東魏茹茹公主墓発掘簡報」・湯池「東魏茹茹公主墓壁画試探」『文物』一九八四—四
- (4) 磁県文化館「河北磁県北齊高潤墓」・湯池「北齊高潤墓壁画簡介」『考古』一九七九—三
- (5) 山西省考古研究所、太原市文物管理委員会「太原市北齊婁叡墓発掘簡報」『文物』一九八三—一〇
- (6) 山西省考古研究所等「太原南郊北齊壁画墓」『文物』一九九〇—一二
- (7) 濟南市博物館「濟南市馬家庄北齊墓」『文物』一九八五—一〇
- (8) 李殷昌「韓國古代壁画の思想的研究—三国時代古墳壁画の思想的考察を中心する」『省谷論叢』一六、ソウル 一九八五

- (9) 正一品官僚である順陽郡王の庫狄廻洛墓（山西寿陽）が発掘されたが、壁画は羨道に侍従、伎楽を、石門に朱雀雲彩と齊龍白虎、忍冬をしか描かれなかった。墓室の壁面は赤く塗り、西壁に白い「十」字形を呈す凶案だけある。（王克林「北齊庫狄廻洛墓」『考古学報』一九七九—三）文を参照
- (10) 従一品官僚である「開府儀同三司驃騎大將軍」の堯峻墓（河北磁県）には、羨道門壁に朱雀羽人図が描かれているが、墓室には壁画がない。（磁県文化館「河北磁県東陳村北齊堯峻墓」『文物』一九八九—四）文を参照
- (11) 北齊廢帝高殷妃また大妙寺尼である李勝難墓（河北磁県）は堯峻墓と同じく羨道門壁に朱雀羽人図があるが、墓室には壁画がない。（前述の蘇哲「東魏北齊壁画墓の等級差別と地域性」『博古研究』博古研究会 一九九二年一〇月、馬理忠、「磁県北朝墓群—東魏北齊陵墓兆域考」第二屆北朝史學術討論會、一九八八年）
- (12) それぞれの報告書を参照。
- (13) 湯池「魏晉南北朝墓室壁画」『中国美術全集』絵画編一二 墓室壁画
- (14) 河北省博物館、文物管理处「河北平山北齊崔昂墓調查報告」『文物』一九七三—一
- (15) 前掲注(10)
- (16) 山東省文物考古研究所「濟南市東八里窪北朝壁画墓」『文物』一九八八—四
- (17) 東魏北齊と茹茹（柔然）との間の政略婚姻は、東魏孝靜帝興和二年（五四一）より始まったのである。その年、高歡は常山王（拓跋鸞）の妹の蘭陵公主を茹茹主阿那瓌の息子に許婚し、また、翌年（五四二）、茹茹主阿那瓌は自分の孫の隣和公主（茹茹公主墓の被葬者）を高歡の九番目の息子に嫁がせた。さらに、茹茹主の要請で、高歡は五十歳の高齡で阿那瓌の娘を自ら娶った。
- (18) 『周書』、『隋書』
- (19) 『魏書・蠕蠕伝』、『南史・蠕蠕伝』、『北史・蠕蠕伝』、『通典』
- (20) 『宋書』、『南齊書・芮芮虜伝』、『梁書・芮芮虜伝』
- (21) 『晋書』
- (22) 柔然の名は車鹿会が自称した部族名。「礼儀」、「賢明」の音訳といわれ、ア

ヴァールに比定する説もある。

- (23) 『魏書・高湖伝』には、「高湖、字大淵、勃海蓐人也。漢太傅哀之後。……齊獻武王（高歡）也」とある。

- (24) 『北史・齊神武帝紀』には、「齊高祖神武皇帝姓高氏、諱歡、字賀六渾、勃海蓐人也。六世祖隱、晋玄菟太守。隱生慶、慶生泰、泰生湖、三世仕慕容氏。及慕容寶敗、国乱、湖率衆歸魏、為右將軍。湖生四子。第三子謐、仕魏、位至侍御史、坐法徙居懷朔鎮。謐生皇考樹生……及神武生而皇妣韓氏歿、養於同產姊塔鎮領獄隊尉景家。神武既累世北邊、故習其俗、遂同鮮卑」とある。

- (25) 注(24) 参照。

- (26) 錢穆『国史大綱』上冊、二一五頁（台北、商務、一九七八年修訂五版）、呂思勉『兩晋南北朝史』六〇四頁（台北、開明書店、一九七七年台五版）、また、王曾才「北魏時期的胡漢問題」十三頁（『幼獅學報』三卷二期、一九六二）など、すべては正史の記載を従っていた。

- (27) 濱口重国「高齊出身考」高歡の制覇と河北の豪族高乾兄弟の活躍『史学雑誌』四九編七、八号 一九三八、後、氏著『秦漢隋唐史の研究』下巻所収、東京大学出版会 一九六五・姚薇元『北朝胡姓考』北京、科学出版社 一九五八・周一良「領民酋長與六州都督」、氏著『魏晋南北朝史論集』所収、繆鈺「東魏北齊政治上漢人與鮮卑之衝突」氏著『讀史存稿』所収、香港、三聯書店、一九七八・譚其驤氏は繆氏の前掲文を読んでから、書信の形で繆と討論して、氏は北齊高氏の出身を高麗高氏だと考えられ、その内容は繆氏の前掲文の後に附している・呂春盛「北齊政治史研究——北齊衰亡原因之考察」『国立台湾大学文史叢刊』之七十五 国立台湾大学出版委員会 一九八七。
- (28) 姚薇元『北朝胡姓考』北京、科学出版社 一九五八。
- (29) 『晋書・四夷列伝・西戎・吐谷渾』、『宋書・鮮卑吐谷渾列伝』、『南齊書・河南吐谷渾氏列伝』、『梁書・諸夷列伝・西北諸戎・河南王国』、『魏書・吐谷渾列伝』、『周書・異域列伝下・吐谷渾』、『南史・夷貊列伝下・西戎・河南王』、『北史・吐谷渾列伝』などによる。

- (30) 前掲注(7) 参照。

- (31) 前掲姚薇元氏の『北朝胡姓考』。

- (32) 『北齊書』・『周書』の庫狄氏諸伝を参考。

- (33) 寧夏回族自治区博物館等「寧夏固原北周李賢夫婦墓發掘簡報」『文物』一九八五・一一

- (34) 陳寅恪『隋唐制度淵源略論稿』北京 中華書局 一九七三年第二次印刷。

- (35) 『史記・李陵列伝』、『漢書・李陵伝』。

- (36) 前掲姚薇元氏の『北朝胡姓考』。

- (37) 洛陽博物館「河南洛陽北魏元叉墓調査」『文物』一九七四・一二

- (38) 洛陽文物工作队「洛陽孟津北陳村北魏壁畫墓」『文物』一九九五・一八

- (39) 『魏書・元叉伝』。

- (40) 前掲「洛陽孟津北陳村北魏壁畫墓」『文物』一九九五・一八

- (41) 山西省考古研究所・大同市考古研究所「大同市北魏宋紹祖墓發掘簡報」『文物』二〇〇一・一七

- (42) 王根田・劉俊喜「大同智家堡北魏石椁墓壁畫」『文物』二〇〇一・一七

- (43) 固原博物館「寧夏固原北魏墓清理簡報」『文物』一九八四・四・王瀧「固原北魏漆棺彩画」『美術研究』一九八四・二・寧夏固原博物館「固原北魏墓漆

- 棺画」寧夏人民出版社 一九八八年。

- (44) 復原の問題で、画面がちよつとずれてしまったが、全体的には正面向きであることに間違いない。

- (45) 鎮江博物館「鎮江東晋画像磚墓」『文物』一九七三・四

- (46) 河南省文化局文物工作队「鄧県彩色画像磚墓」文物出版社 一九五八年。

- (47) 南京博物館等「南京西善橋南朝墓及其磚刻壁画」『文物』一九六〇・一八、九

- (48) 羅宗真「南京西善橋油坊村南朝大墓的發掘」『考古』一九六三・一六

- (49) 南京博物院「江蘇丹陽胡橋南朝大墓及磚刻壁画」『文物』一九七四・二二

- (50) 南京博物院「江蘇丹陽陽湖胡橋、建山兩座南朝墓葬」『文物』一九八〇・二二

- (52) 湖南省博物館「新發現的長沙戰國楚墓帛画」『文物』一九七三・一七・湖南省博物館「長沙子彈庫戰國木椁墓」『文物』一九七四・二二・『長沙楚墓帛画』

北京 文物出版社 一九七三年。

(53) 曾布川寛「崑崙山と昇仙図」『東方学報』京都五一冊 一九七九年。

(54) 郭沫若「關於晚周帛画的考察」『文史論集』北京 一九六一年。

(55) 湖南省博物館(その他)『長沙馬王堆一号漢墓發掘簡報』北京 一九七二年・湖南省博物館・中国科学院考古研究所『長沙馬王堆一号漢墓』北京 一九七三年。

(56) 湖南省博物館・中国科学院考古研究所「長沙馬王堆二、三号漢墓發掘簡報」『文物』一九七四・一七・中国科学院考古研究所・湖南省博物館写作小組「馬王堆二、三号漢墓發掘的主要收穫」『考古』一九七五・一

(57) 臨沂金雀山漢墓發掘組「山東臨沂金雀山九号墓發掘簡報」『文物』一九七七年・一一一

(58) 甘肅省博物館「酒泉、嘉峪関晋墓的發掘」『文物』一九七九・一六・甘肅省文物考古研究所編『酒泉十六国墓壁画』文物出版社 一九八九年。

(59) 遼寧省博物館文物隊、朝陽地区博物館文物隊、朝陽県文化館「朝陽坎台子東晋壁画墓」『文物』一九八四・一六

(60) 李慶發「遼陽上王家村晋代壁画墓清理簡報」『文物』一九五九・一七

(61) 洪晴玉「関于冬寿墓的發現和研究」『考古』一九五九・一一

(62) 東潮「遼東と高句麗壁画―墓主圖像の系譜―」『朝鮮学報』第四百九輯、朝鮮学会 一九九四

(63) 東潮「朝鮮三国時代における横穴式石室墳の出現と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』四七 一九九三年。

(64) 雲南省文物工作队「雲南昭通後海子東晋壁画墓清理簡報」『文物』一九六三年・一一二

(65) 百橋明穂・中野徹主編『世界美術大全集』東洋編・隋唐 小学館 一九九七年

(66) 劉中澄氏は「单独正面端坐」の墓主像が仏教影響をうけていると、すでに一九八七年に指摘された(「関于朝陽袁台子晋墓壁画の初步研究」『遼海文物学刊』三参照)。

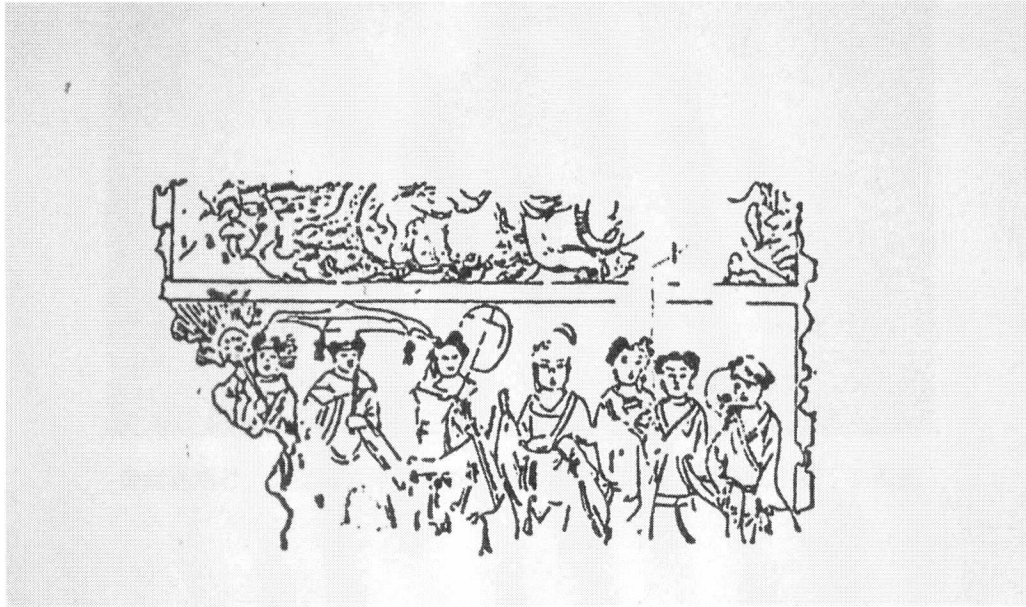
柴生芳(さい・せいほう)

一九六九年七月 甘肅省寧縣生れ、

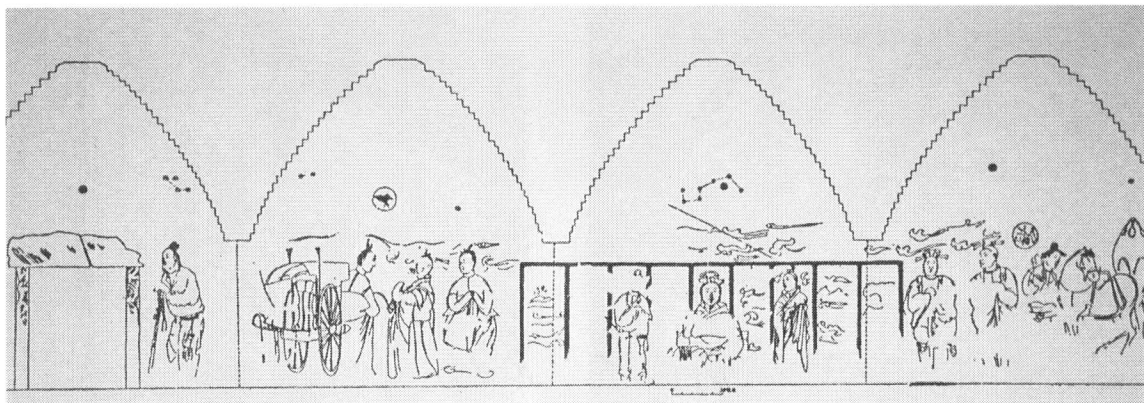
一九九〇年 北京大学考古系卒業

甘肅省考古研究所助理研究員

(専門) 魏晋南北朝時代考古美術史



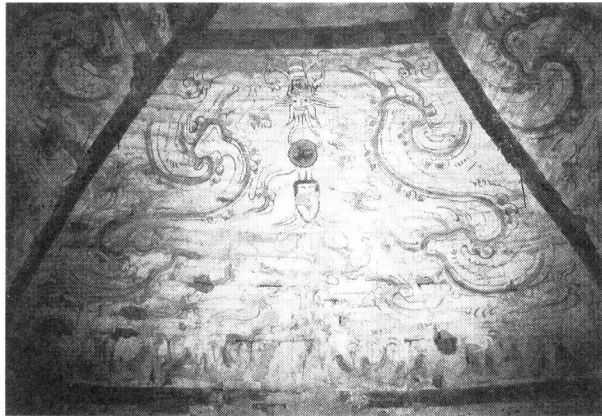
図版1 正面向き墓主立像 茹茹公主墓奥壁 東魏（550年）河北省磁県



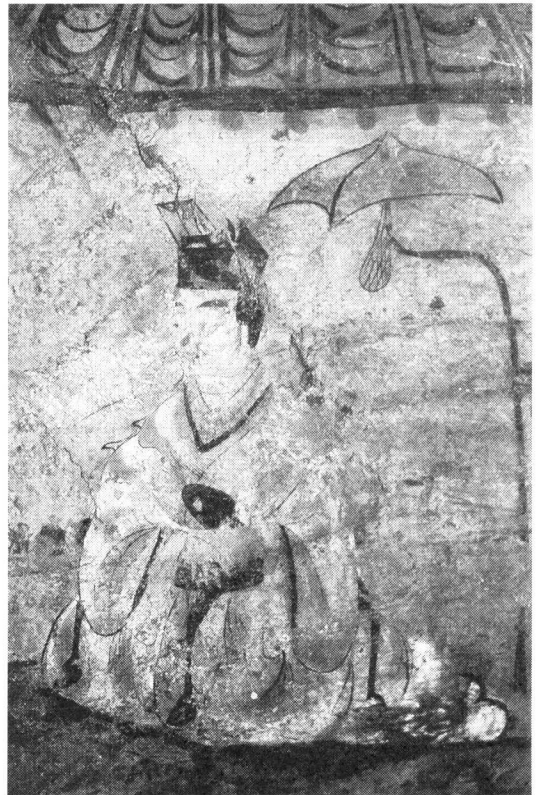
図版2 正面向き墓主坐像 道貴墓奥壁 北齊（571年）山東省済南



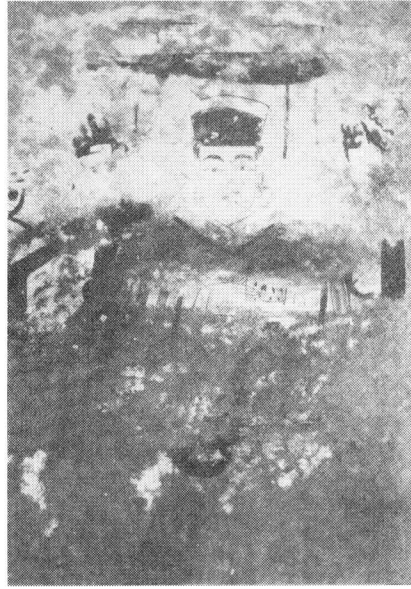
图版 3 墓主燕乐图 丁家閤 5 号墓前室奥壁 十六国时代 甘肃省酒泉



图版 5 东王父图 丁家閤 5 号墓前室东壁 十六国时代 甘肃省酒泉



图版 4 墓主图（燕乐图的部分）丁家閤 5 号墓前室奥壁 十六国时代 甘肃省酒泉



図版 6 正面向き墓主坐像
袁台子壁画墓西龕室奥壁
十六国時代 遼寧省朝陽



図版 7 正面向き墓主坐像 冬寿墓（安岳3号墓）西耳室奥壁 高句麗（357年）朝鮮



図版 8 正面向き墓主坐像 霍承嗣墓奥壁 東晋（386～396）雲南省昭通